鳳鳴
図書館報

編集発行
大館鳳鳴高等学校
生徒会図書委員会

印刷
㈲大館孔版社

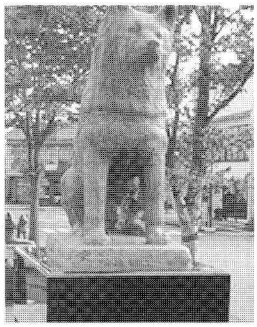
戦後七十年…

昨年は戦後七十年という節目の年であった。
そこで私たちは、大館駅前にある有名な像にまつわる話と、戦後の本事情に着目した。
今回はそれらについて紹介していきたいと思う。

大館駅前のハチ公像

皆さんはご存じだろうか。大館駅前にあるハチ公像が、実は二代目であるということを。なぜ二代目かというと、日本全国で発令された「金属回収令（一九四一年）」が関係している。

「金属回収令」とは、家庭内にある鍋やスプーン・フォークと言った金属類を回収し、兵器を作るための資源調達を目的とした法令だ。この法令により、初代ハチ公像は多くの人に惜しまれながら撤収された。


大館駅前のハチ公像

戦後の本事情

敗戦から二年後、毎日新聞社が一九四七年に全国の一六歳以上の男女を対象とした全国読書世論調査を始めた。スタート時の柱は「よいと思った本」調査だった。

●一九四七年「よいと思った本」調査より

1、尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』
（戦前の治安維持法の下、スパイ事件として騒がれたゾルゲ事件[1]に関わったとして、刑死した尾崎秀実が獄中から妻子に送った書簡[2]集。物資不足、混乱のさなかの刊行だった。）
2、レマルク『凱旋門』
3、エーヴ・キュリー『キュリー夫人』
4、宮本百合子『風知草』
5、森正蔵『旋風二十年』

●一九四八年「よいと思った本」調査より

1、太宰治『斜陽』
（敗戦直後の混乱の中で没落していく貴族階級の人々の心情や人間模様を情緒豊かに描きだした作品。出版当時、斜陽族[3]という言葉を生み出すほど爆発的なブームを巻き起こした。）
2、尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』
3、レマルク『凱旋門』
4、吉川英治『新書太閤記』
5、ドストエフスキー『罪と罰』

『斜陽』

「読書世論調査30年」（毎日新聞社）は『愛情はふる星のごとく』が支持を集めた理由について、「妻子にそそぐ限りない愛情の書」と説明している。いわば戦時中の売国奴[4]の書簡が「よい本」に選ばれたことになり、日本人の価値観の変容を示した。

1ゾルゲ事件…一九四一年、新聞特派員で駐日ドイツ大使の私設情報顧問ゾルゲ、もと満鉄嘱託尾崎秀実らが、日本の政治上・軍事上の機密をソ連に通報していた容疑で検挙された事件。
2書簡…手紙。礼状。
3斜陽族…第二次世界大戦後、世の中の急激な変化によって没落した上級階級の人々。
4売国奴…母国の情報等を外国に売って私益を図る奴。

古典アレンジ作品

古典文学は読みづらくて難しいと考えている方も多いのでは？決してそんなことはありません！ここでは古典に親しみを持ってもらいたいと思い、古典作品をアレンジした作品をご紹介。

今は昔、リアクション芸人という者ありけり。テレビに映りて身体を張りつつ、よろずのことに挑戦しけり。その挑戦の中に、湯気の沸き立つ湯ありける。あやしがりて、寄りて見るに、前振りと思ひ及ぶ。「押すな、押すな」と言いけるに、後ろから押されたり。その男、湯気に落ちけり。見物みなその芸をわらひき。

（訳）今となっては昔のことだが、リアクション芸人という者がいた。テレビに出演し、身体を張って様々なことに挑戦したそうだ。その挑戦の中に、熱湯があった。不思議に思って、近寄って見ると、芸の前振りだと気づく。「押すな、押すな」と言ううちに、後ろから押されてしまった。その男は熱湯に落ちてしまった。見物人はみなその芸を笑った。（参考『竹取物語』冒頭）

恋愛小説特集

三年生はいよいよ受験ラストスパート。様々な理由で悩んでいる人もいるだろう。

勉強に集中できない時には休憩を取って欲しい。恋愛小説には人を引き込む魅力がある。そんな思いからやる気が出たり、癒してくれたりするような恋愛小説を紹介する。

●『神様のカルテ』

夏川草介　著

『神様のカルテ』

これはとある病院の、とある時間を切り取った作品である。

主人公には妻がいて、同業者がいて、友達がいて、そして患者がいる。周りに人がいるからこそ、他人に気持ちを伝えることの難しさに気づかされることが、あなたにもあるのではないか。本当の想いを伝えたいとき、あなたはどうするのか？誰かが本当に伝えたかったことを知ったとき、あなたは何を思うのか？

読み終わったなら立ち止まって、振り返ってみてほしい。

●『アオハライド』

咲坂伊緒　著（マンガ）

『アオハライド』

「7時、三角公園の時計のとこ」。双葉が初恋の相手、洸と交わしたこの約束が守られることはなかった。しかし儚いこの恋はまだ終わらない。高校での洸との再会により双葉のいる世界は大きく動き出す。

青春とは？と問いかけられた時皆さんならどう答えるだろうか。きっとその答えは十人十色でその中にはそれぞれの思いがぎっしりと詰まっているだろう。私が読んだこの本のテーマは恋愛、そして青春だ。ただ一人にはなりたくない、そう思って自分を見失いつつあった双葉が初恋の人・洸と運命の再会を果たす。その出会いは双葉自身や、彼女を取巻く世界も変えてゆく。言葉にできない不安や喜びが記されたこの本にはたくさん共感できる部分があった。今をぼんやり過ごすのはもったいない。

さあ、思い切ってアオハルに乗れ！

●『GOSICK』

桜庭一樹　著（ライトノベル）

『GOSICK』

東洋からの生真面目な留学生、久城一弥。ヨーロッパの小国、ソヴュールの聖マルグリット学園で彼を待ち構えていたのは奇妙な噂と怪談だった。そしてもう一つ彼を待っていたもの、それは聖マルグリット大図書館の最上階に棲む少女、ヴィクトリカ。ふとしたことから二人は出会い、不思議な運命を共にする。

本来はミステリー作品なのだが、恋愛物好きの方にもオススメできる本。

●『陽だまりの彼女』

越谷オサム　著

『陽だまりの彼女』

奥田浩介は幼馴染でかつて「学年有数のバカ」と呼ばれていた渡来真緒と十数年ぶりに再会する。浩介は出来る女へと成長していた真緒と恋人同士となり結婚まで意識し始める。しかし彼女はある秘密を抱えていた。

この本は彼らが試練を乗り越えていく様子やぶつかりながら絆を深めていく様子、お互いを思いやっている様子も書かれている。そして彼らの成長は読み手にも伝わってきて、感情が物語の世界へと引き込まれ、ラストは涙を禁じ得ないだろう。

秋の暮つかた、のどかに艶なる空に、東に向きて窓のよきほどにあきたる、隙間より見れば、かたち清げなる男の、同い年ばかりにて、うちとけたれど、心にくつ、のどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。

（訳）秋の、のどかで風情があり、おだやかで優美な空で、東に向いている教室の窓がほどよく開いている。開いた窓から隣のクラスをのぞけば同い年くらいのイケメンな男性がくつろいだ様子で過ごしていて、心が引き寄せられた。のどかな風情で机の上に本をくり広げて見ていた。どのような人であるか、尋ねてみたい。

（参考　『徒然草』四十三段）

うれしきもの。点入筆記帳、ただのも、よき得たる。わが師なる人の、書になき事、問ひたるに、ふと覚えたる、われながらうれし。常におぼえたることも、また人の問ふに、清う忘れてやみなりぬるをりぞ多かる。

（訳）うれしいもの。ドット入り罫線のノート、またふつうのノートであっても、よいものを手に入れたとき。先生が、教科書に載っていないことを問いかけ、すぐに思い出せたときは、我ながら嬉しい。普段覚えていることも、改まって人が尋ねると、きれいに忘れてそのままになってしまう場合が多いものだ。

（参考　『枕草子』「うれしきもの」）

師により思ひならひぬ生徒たちはこれをや尊敬といふらむ。

（訳）先生によって、今までに感じたことのない思いを味あわされましたよ。生徒たちはこれを尊敬というのでしょうね。

（参考　『伊勢物語』三十八段「恋といふ」）

芥川賞について

第一五三回（二〇一五年上半期）の芥川賞で、お笑い芸人又吉直樹さんの作品が受賞し、大変大きな話題となった。そこで改めて芥川賞とはどのようなものか、また又吉さんの作品の見どころを紹介していきたいと思う。

●芥川賞とは

芥川龍之介賞は一九三五年（昭和十年）に、当時文芸春秋の社長であり、芥川龍之介の友人であった菊池寛によって、直木三十五賞と同時に創立された。

芥川龍之介は一八九二年（明治二五年）、東京に生まれた小説家で、日本や西洋の古典を現代に蘇らせた天才作家である。主に短編を多く書き、代表作は『羅生門』『鼻』など数多く存在する。

芥川賞は、新人作家の純文学の短編小説を評価するもので、無名作家から人気作家への登竜門とされている。主な受賞者は松本清張、井上靖、大江健三郎などだ。

現在は、受賞者には正賞として受賞者名などが彫られた「銀座和光」謹製の懐中時計、副賞として百万円が贈られる。しかし戦前はブランドがバラバラで、太平洋戦争直前には輸入時計の減少のため、時計ではなく陶芸家・河井寛次郎の壺などが渡されたこともあった。

●芥川賞にまつわるエピソード①

元々直木賞候補だった松本清張の『或る「小倉日記」伝』は、選考委員であった永井龍男の提案により芥川賞候補へと移された。遅咲きの作家であった清張が処女作を発表して三年目の新人であったこと、候補作が短編小説であったことが芥川賞に向いていると判断されたことが理由だと考えられる。

この小説は選考委員の坂口安吾から絶賛され、見事芥川賞を受賞した。安吾は選考で「この文章は実は殺人犯をも追跡しうる自在な力」があると述べており、後に推理作家として大成する清張の才能を見抜いていた。

●芥川賞にまつわるエピソード②

世間を賑わせた芥川賞であるが、太宰治についてある逸話が残っている。芥川龍之介を敬愛していた太宰にとって芥川賞はどうしても欲しかった。しかし第一回の候補になったものの落選してしまう。

川端康成は選評にて太宰を批判、これに対し怒りを抱いた太宰はすぐさま「大悪党だと思った。」と雑誌『文藝通信』に反論文を掲載した。その後、太宰を支持した選考委員の佐藤春夫や罵倒した川端康成に芥川賞を懇願する書簡を送った。中には四メートルに及ぶものもあった。しかし結局太宰が芥川賞を手にすることはなかった。

●『火花』について

今年の芥川賞は、お笑い芸人コンビ「ピース」の又吉直樹さんの作品『火花』が受賞し話題となった。

この作品は、お笑い芸人の僕―徳永―と先輩芸人の神谷を中心とした物語である。中でも興味をひかれるのは神谷の生き方であろう。彼は自分が面白い、正しいと思うことに対して強い意志を持ち、それを他人に正面からはっきり伝えられる人物だ。このような人物は、遠慮がちな日本人には珍しいため、私たち読者の心に強く響く。これは「火花」の読みどころの一つではないだろうか。

ほかにも、読むほど「笑い」そして「生きる」ことを考えさせられる物語だ。皆さんにもぜひ読んでもらいたい。

教科書に載った作品

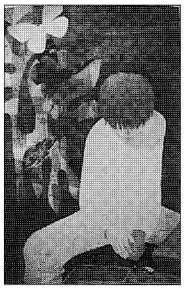
小学校や中学校の国語の教科書に載っていた作品で、印象に残っているものは皆さんにも少なからずあると思う。今、それらの作品を振り返り、当時の感想を思い出すだけでなく、当時とは違う印象を発見していきたい。

●エーミールという少年

『少年の日の思い出』といえば、エーミールの「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな」という台詞だろう。世間でもエーミールの人気は高い。

彼のような模範少年は嫌われやすい傾向にある。実際、文中では「僕」は彼をねたみ、嘆賞しながら憎んでいたと書かれている。それでも人々はエーミールが好きだ。それは彼の冷静さが作用していると思われる。「僕」が犯してしまった大きな罪を、彼は怒鳴りつけたりしなかった。ただ冷淡に、言葉を発した。本当なら内心辛いはずだ。激昂されてもおかしくはない。しかし彼は冷静を装った。心の中ではとても悲しみ、怒っていたに違いない。とても動揺しているのだ。

そのような普通の子どもと変わらない彼のもろく儚い様が人々の心をつかんだ。より私達に近しい存在である彼だからこそ、彼の台詞が人々の心に強く印象づけられている。ゆえに彼の人気が高いのだ。

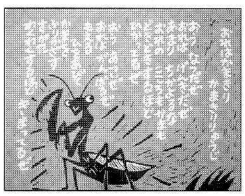


光村図書「国語１」より

●前向きなかまきりりゅうじ

「おれはかまきり」は工藤直子さんの詩集『のはらうた』に収録されているうちの一篇だ。この詩はかつて小学1年生の国語の教科書に掲載されていた。かまきりりゅうじが語り手となったこの詩を授業で学習した時、教室に笑いが巻き起こったことを覚えている。かまきりりゅうじの「～だぜ」という口調が幼かった私たちの心をくすぐったのだろう。しかし、この「ぜ」には大きな意味が込められていると考えられる。韻を踏んでリズム感を出す技法的な面の他に、語尾を言い切った形にすることによって、かまきりりゅうじの前だけを向き生きる格好いい姿勢を率直に表現している。

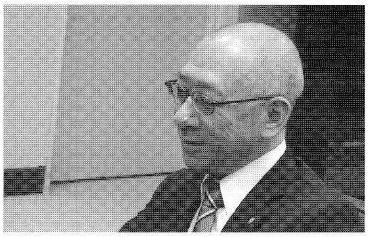
かまきりやその他の動植物にも名前があり、心がある。工藤さんの詩の特徴だ。『のはらうた』にはかまきりりゅうじの他にも、多くの語り手の詩が収録されている。ぜひ読んでみてほしい。



光村図書「国語一」より

校長先生へインタビュー

十二月某日、私たち図書委員は校長室で立石隆博校長先生と対面していた。今回、図書館報の企画で校長先生へインタビューをすることになったのだ。



今年度、大館鳳鳴高校に赴任してきた立石校長先生はどのような人物なのだろうか？本に関わる質問を中心に伺っていきたいと思う。

●高校生時代はどのような生徒でしたか？

「小中学校時代は暴力が嫌で学校に行きたくないと思っていました。高校入学直後、上級生が威嚇に来たりはしましたが、それ以降は何もなく、こんなに楽な環境はないと感じていました。」

●高校生時代の本にまつわるエピソードを教えて下さい。

「高校生時代はあまり本を読みませんでしたが、松本清張の作品は読んでいました。大学は高校より読み、文体が美しい川端康成や秋田県出身の石川達三、「平和を希求する、戦う文学者」の大江健三郎などを読んでいました。」

●現在では電子書籍がよく利用されています。校長先生は紙の本と電子書籍どちらがよいとお考えですか。

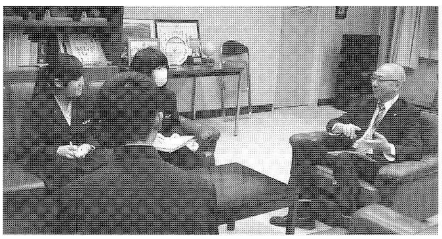
「私は古い人間なので電子書籍は使ったことがありません。電子辞書も使ったことがありません。しかし辞書はいろんなことが一ページに書かれているので紙の物が便利だと思います。」

●読書をするということは校長先生にとってどのようなことですか。

「活字書籍がないと気が狂いそうになる。それほど大切な存在です。」

●鳳鳴生におすすめしたい本、また鳳鳴生に伝えたいことを教えて下さい。

「橋本五郎の『総理の覚悟』『総理の器量』は気楽に読めると思いますが、一人一人で面白いと感じるものは違うので、自分が読みたい本を読めばいいと思います。

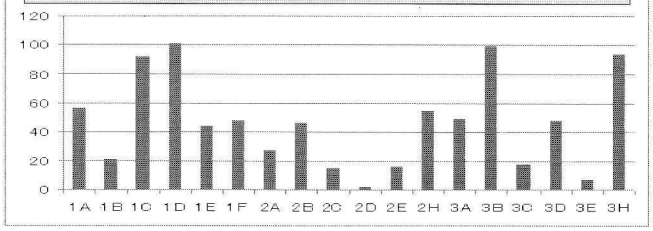


日常生活は語彙不足であるように思います。私が嫌いな言葉の一つ、「立ち上げる」はその一例。会社を「設立する」など、ふさわしい言い方があるのに、なんでも「立ち上げる」で済ましてしまう。皆さんには、高校のうちから美しい文体、美しい日本語にたくさん触れて欲しい。そしてたくさんの美しい言葉を身につけて欲しいと思っています」

＊　＊　＊

校長先生、インタビューに応じて頂きありがとうございました。

貸出ランキング（平成27年４月７日～平成28年１月29日）



今回のランキングでは一位が１Ｄ、二位が３Ｂ、三位が３Ｈという結果になった。全体的に一年生の貸出冊数が多かった。これは朝読書や授業の調べ学習が大きく影響していると考えられる。

今年度の委員の活動

昨年十月三日にビブリオバトル秋田県高校生大会の大館大会が大館市立中央図書館で行われた。これは自分のおすすめの本を制限時間内に紹介し合い、その中で「読みたくなった本」を決めるゲームである。

大館鳳鳴高校からは２Ｂ齋藤栞さん、２Ｃ佐藤友紀さん、１Ａ奥山うららさん、１Ｄ菅原果林さんの四名が出場した。他校のライバルが多くいる中でおすすめする本の魅力を時間いっぱい紹介した。この大会は彼女たちにとって大きな経験となったと思う。

また、昨年八月六日と今年一月八日には大館市立中央図書館で高校生読み聞かせ会が行われた。大館市内の高校五校の有志が集まり、合同で幼稚園児たちに絵本の読み聞かせを行った。こちらでは八月に２Ｂ齋藤栞さん、２Ｄ畠山菜絵さん、一月には２Ｂ齋藤栞さん、佐藤茜さん、２Ｃ松宮理佳さんが参加した。

一月は百人近くの幼稚園児たちが集まった。高校生たちは登場人物に成りきり、園児たちにも時折呼びかけるなど工夫をして読み聞かせをした。また絵本だけではなく手品なども披露し、園児たちは楽しんだ様子だった。

お正月には「迎春」という挨拶がよく見られましたが、実際は冬真っ只中で春らしさは全く無く、車で通勤している私は雪道と格闘の毎日です。

鳳鳴生の皆さんも日々勉強や部活で忙しい毎日で寒さが堪えるでしょう。特に受験生にとっては最も重要で大変な時期だと思います。

皆さんにとって（私にとっても）優しくて暖かい「春」が訪れることを願うばかりです。

さて、私は昨年十月から大館鳳鳴高校の学校司書となった柴田知佳といいます。北秋田市出身、中学・高校は剣道部でした。本は物語のものが好きですが、エッセイや新書などいろいろなジャンルも読みます。好きな作家は伊坂幸太郎、角田光代です。皆さんともっと仲良くなりたいと思っています。図書館に来た際には遠慮なく話しかけてください。

柴田